

杉田梅林をめぐって

湯 本 優 希

明治期の文人集団「根岸党」の著名な紀行文に「さきがけ」(『東京朝日新聞』明治二十六年二月十四日～二月十八日)がある。これは明治二十六年に現在の神奈川県横浜市磯子区にある

「杉田梅林」に根岸党の面々が訪れた様子を綴った紀行文である。また、饗庭篁村、幸田露伴による江ノ島・鎌倉を巡った饗庭篁村「女旅」(『東京朝日新聞』明治二十四年三月七日～三月二

十一日)や、饗庭篁村、幸堂得知、右田寅彦らによる紀行文「杉田の梅」(『東京朝日新聞』明治三十三年二月十四日(二月二十八日)等)、根岸党の面々はたびたび「杉田梅林」を訪れた。さらに同時期に活躍していた「硯友社」も大橋乙羽「晴好雨記」(『太陽』第二巻第六号、明治二十九年三月)に見られるように杉田梅林を訪れている。このように明治期にもはやされていた杉田梅林とはどのようなところだったのだろうか。



『磯子の史話』(磯子区制50周年記念事業委員会「磯子の史話」出版部会、昭和五十三年)によれば、杉田梅林は江戸は元禄の頃より栄えたとされているが、そもそものはじまりは小田原北条氏の家臣であった間宮信繁が梅の実際の収益を生活の一助とするために梅樹を植えさせた天正年間(一五七三)にさかのぼる。元禄(一六八八)の頃にはすでに約三万六千本の梅樹が杉田の地を賑わし、文化・文政年間(一八〇四)には最盛期を迎えた。『横浜市史稿』風俗編(名著出版、昭和四十八年)には、この頃「梅花飯」という料理が考案され名物となったとの記述もあり、食文化にも影響を与えてい

たことが窺える。杉田梅林は土地一帯を彩る多くの梅樹と屏風ヶ浦の景観の美しさが相俟って、次第に名勝地として天下に喧伝されていった。そして明治十七(一八八四)年、明治十九(一八八六)年に英照皇太后と昭憲皇太后が観梅のために二度も妙法寺に行幸されたことでさらに人口に膾炙していったのである。

天保五(一八三四)年と天保七(一八三六)年の二度にわたり刊行された著名な地誌である『江戸名所図会』では「巻之二 天璇之部」において、「杉田村梅園」と題された挿画が掲載されている。これは杉田梅林に関する資料の多くにおいて紹介されており、江戸時代にあつてすでに名所として周知であったことが窺える。

明治期には数多くの地誌や名所案内記が刊行された。それらに取り上げられた「杉田梅林」について、ここで紹介しておく。

著名なものに明治二十九(一八九六)年に妙法寺智旭が永勢子行の協力のもと編集し刊行した『杉田勝概』がある。例えば「横浜の本と文化 横浜市中心図書館開館記念誌」(横浜市中心図書館、平成六年)では、「明治の観光案内記」の中の「杉田の観光案内」にお

いてこの「杉田勝概」が唯一取り上げられ紹介されている。この「杉田勝概」は杉田梅林を題材とした詩文集であり、付録として地誌が収載された。杉田梅林は、多くの文人たちが訪れ作品を残した勝地であったのである。

明治十九(一八八六)年には安田米斎「杉田梅花村誌」(杏雨山房)が刊行されている。これは管見の限り「杉田」や「梅花」の名を冠した初の案内記であるが、先の「杉田勝概」に比べてこれまで注目されてこなかったといつてよい。まず「杉田村 武蔵国久良岐郡」と「梅樹蕃殖」の項目において村や梅樹の歴史が語られる。次の「観梅順路」では「第一線路笹下通」と「第二線路海辺通」というふたつの経路が提示され、例えば「第一線路笹下通」では「横浜停車場ヨリ二十六丁吉田新田ヨリ六丁蒔田村ヨリ十一丁(中略)杉田村ニ至ル合セテ三里十六丁ナリ」との説明がなされる。そして「梅花期節及種類」に関する案内といった項目が続き、「附録」として、後述する佐藤一斎による杉田観梅紀行文「杉田村観梅記」が掲載される。まさに「杉田梅林」を中心に据え、杉田村への観光を促す案内記であったといえる。

田発行所から石野瑛「梅の杉田」という案内記も刊行されている。ここでは、米斎の「杉田梅花村誌」に類似したさまざまな項目が立てられ、杉田の地誌や観光案内が記される。そのうち、「杉田に関する名文」「杉田に関する詩歌」という項目が立てられ、それぞれ名文・詩歌が列挙されている。かねてより文人に愛された名勝であることが強調されているのである。

日本初のグラフ雑誌である『風俗画報』では「新撰東京名所図会」などといった各地の名所特集する増刊号が刊行されていた。その中に『風俗画報』増刊第二百五十七号として明治三十五(一九〇二)年十月五日に発行された『横浜名所図会』がある。横浜のさまざまな名所が挙げられる中、「見物の葉 附花暦」内の「花暦」において、「梅」の項目に「杉田梅莊」が挙げられている。

広く人々の話題となっていた野崎左文『日本名勝地誌』第二編(博文館、明治二十七年)における杉田梅林は、次のように紹介されている。

杉田梅林 東京近傍に梅林の名あるもの多くは平坦の地に在りて麦隴菜圃と交はり毫も眺望の賞すべき無しと雖も唯り此地は然ら

ず、前は海に面し後は山を負ひ風色自ら秀霊、加ふるに梅樹の桎梏たるあり仙境の名に負かずと謂ふべし、梅は後山の中腹より始めて

其麓に多く山を牛ノ背と云ひ村を杉田と云ふ即ち根岸村より金沢に至る別路に衝れり、数年前村民梅樹を外人に売与して大に其数を減じたりと雖も猶ほ花の観るべきも

の多くして春至れば韻士騷客来りて幽香を賞し一村亦た花の爲めに潤ふと云ふ

ただし、ここでは杉田梅林の衰退の兆しについても指摘されている。

しかし、田山花袋が編集したことでは知られる明治末期に刊行された『新撰名勝地誌』（博文館、明治四十三年）においても、杉田梅林は依然景勝地として登場している。

昭和四（一九二九）年に鉄道省が編集した『東京から日帰り名勝案内図』（日本旅行協会）においても、杉田梅林は「東京郊外散策暦」の中の二月の梅の名所として挙げられており、「横浜市電杉田停留場前」との交通案内があった。

こうした地誌や案内記から、杉田梅林が次第に衰えを見せつつもやはり日本の景勝地のひとつでありつづけたこ

とが窺える。しかし現在では、かつて梅の名所として栄えた「杉田梅林」の名残をとどめてはいない。



杉田梅林とさまざまな点で相似である梅林がある。現在の奈良県月ヶ瀬の三重県との県境付近に位置する「月ヶ瀬梅林」である。両者の相似性についてはこれまで指摘されてこなかった。

前述の通り、杉田梅林は梅の実を生活の一助とするために植樹がはじめられたことがその起源である。『月ヶ瀬村史』（月ヶ瀬村、平成二年）によれば、月ヶ瀬梅林もこれと同様に烏梅の収穫を目的としていた梅林であった。また、勝地としての杉田梅林は、梅花だけでなく、梅花の彩りに屏風ヶ浦の眺望が加わり景勝地としての人気を勝ち得た地であった。月ヶ瀬梅林は、「月ヶ瀬梅溪」との呼称もあるように、溪谷を内包している。梅花が咲き乱れる山々の間を五月川が流れるという全景が名勝と銘打たれたのである。

さらに、『磯子の史話』『月ヶ瀬村史』によれば、明治二十三（一八九〇）年に「月ヶ瀬保勝会」が、明治二十八（一八九五）年に「杉田保勝会」がそれぞれ発足されており、明治二十年以降その景勝が衰えをみせていったことも

共通している。

また、両梅林の特徴として、明治期にあつて多くの文人が訪れていることも看過できない。なかでも特筆すべきは、根岸党と硯友社が揃ってどちらの地も訪れ、紀行文を書き著わしているということである。根岸党と硯友社はどちらも杉田梅林を訪れていると先に触れたが、彼らはともに明治二十六年（一八九三）年に月ヶ瀬梅林にも遊行し、月ヶ瀬観梅紀行文を書いているのである。

『風俗画報』第六十六号（明治二十七年二月）では、大橋乙羽（この号での名は「乙羽生」となっている）が「人事門」において「月ヶ瀬杉田梅見の栞」を発表した。この「月ヶ瀬杉田梅見の栞」には名和永年画「月ヶ瀬杉田梅見の栞」が付されている。この図は「武州杉田梅園」が主として描かれており、その上部分に「和州月ヶ瀬」と「和州桃ヶ野村」がそれぞれ挿入され、「杉田梅園」を中心とした構図となっている。この「月ヶ瀬杉田梅見の栞」の本文では、「杉田梅園は関東の名所なり」「月の瀬は関西の勝地なり」と対比的に描かれていることも見逃せない。

ここで特に指摘しておきたいのは、重要なのはこれらの梅林を天下に知ら

しめたきっかけが観梅紀行文であつたということである。各々の梅林に関する資料の多くに、その梅林が名所となつた理由として観梅紀行文の存在が紹介されてきたが、それが杉田梅林と月ヶ瀬梅林の類似点としては注目されてこなかった。

元禄の頃より栄えはじめた杉田梅林は、文化四（一八〇七）年に、儒学者であつた佐藤一斎が著した「杉田村観梅記」により、人々の間に浸透していった。

月ヶ瀬梅林も、はじめは周辺に住む人々にしか知られていない地であつた。この梅林を天下の名勝たらしめたのは、儒学者であつた齋藤拙堂の月ヶ瀬紀行「月ヶ瀬記勝」である。拙堂が月ヶ瀬を訪れたのは文政十三（一八三〇）年のことで、その後『月ヶ瀬記勝』は嘉永四（一八五一）年に刊行され、これにより月ヶ瀬梅林の名は全国にとどろくこととなつた。月ヶ瀬梅林を訪れる文人墨客はみな口を揃えて、『月ヶ瀬記勝』を読み、この地を訪れたいと思つていたと綴っている。拙堂『月ヶ瀬記勝』による影響は多大なものであつた。

これと同様のことが、杉田梅林にもいえる。佐藤一斎の「杉田村観梅記」は、先述の「杉田勝概」や安田米斎「杉田

梅花村誌」、石野瑛『梅の杉田』などをはじめとした案内記の類や地誌、文範書などに数多く掲載され、多くの人々の目に触れていた。前掲資料『新撰名勝地誌』においては杉田梅林の項目に、

佐藤一斎が所謂「村皆白雲世界その巔を極めて俯瞰すれば、花光雲影、遠近相含み、而して海灣晶々然一大鏡を磨き、漁舫その間に往來する」の景頗る賞すべく。

この佐藤一斎「杉田村観梅記」を想起している紀行文を紹介していこう。まずは『杉田勝概』に集められた杉田観梅紀行文における記述を抜粋しまとめた。

斎藤竹堂「観梅紀行」（天保十四年）では「問之即往年一斎先生來宿処」と、宿を見て佐藤一斎を思い浮かべる場面が描かれている。菊池三溪「観梅游記」（慶応二年）では、ある農家に立ち寄り、「則暖楼（筆者注・佐藤一斎のこと）記中所載」と述べ、さらに別の場面でも「予嘗読愛日楼（筆者注・佐藤一斎のこと）観梅記」と述べている。松村西莊「杉田遊記」（明治十二年か）は冒頭が「余嘗読暖翁（筆者注・佐藤一斎のこと）杉田観梅之記」から始まり、

佐藤一斎の強い影響を感じさせる。石崎小洲「杉田観梅記」（明治二十二年か）にもこれと同様に「余嘗読佐藤一斎游説」とある。後藤錦川「杉田村観梅記」（明治十四年）においても冒頭から、「余嘗読愛日楼集。識武州杉田之勝」と杉田梅林を知ったきっかけが佐藤一斎であると語られる。豊島洞斎「杉田観梅記」（明治十五年か）では杉田梅林についてかつて「佐一斎」が訪れた場所であると思いを馳せる記述と、杉田で出会った梅花飯について「愛日楼観梅記中載之」と思い起こす記述がある。簡素な紹介ではあるが、『杉田勝概』に収載されている漢文体紀行文のほとんどに佐藤一斎の名が見られた。

し、その中でたびたび佐藤一斎「杉田村観梅記」を引き合いに出している。まず「余佐藤一斎の杉田村観梅記を読み久しく之に遊ぶの志あれとも春々便宜を得ず」とあり、「往時佐藤一斎の遊を省見は亦其不便甚しきを知るへし」、「一斎遠路の行歩柲」など自身の旅程に佐藤一斎の紀行文を重ねていくのである。杉田梅林の中心である妙法寺を訪れた際には「一斎の記に園曰く」と始まり一斎の紀行文を引用してその景勝を賞している。読者は河北仙史の旅程を読みながら、佐藤一斎の「杉田村観梅記」の足跡をもたどっているように感じられるだろう。

さらに、大町桂月は「杉田の一夜」（『太陽』第四巻第六号、明治三十一年三月）において、次のように述べている。

憶ふ昔、佐藤一斎の杉田観梅記に感服のあまり、頓に遊意を催して、夜八時、都を出で、明方杉田に着し、その日また直に帰路に就き、一昼夜を全く徒歩して辞せざるまでに思ひこがれたる地なれど

桂月は幾度も杉田の梅林に足を運び、杉田の観梅紀行を何本も執筆している。このような桂月の杉田梅林への憧憬の原点は佐藤一斎「杉田村観梅記」

にあるといえよう。

土居香国「杉田看梅記」では、掲載誌『太陽』（第四巻第十二・第十三号、明治三十一年六月）において石川鴻斎の評が付されており、そこに「始終梅花繙繆。豈与花神有宿縁者耶。夫月瀬拙堂記之。杉田一斎記之。爾來觀客多」とあり、拙堂と一斎がともに引き合いに出されている。

山川勝具「杉田観梅記」（『淑女』第三巻第四号、第六号、明治三十四年四月～六月）においては、

文化年間に。此村の善悪居士と云ふ老人があつて。梅花飯といふものを炊いで。それを客に供へたさうで。佐藤一斎先生の記中にも見えて居る。

という、梅花飯についての話が、佐藤一斎の紀行文の中でも語られていたとわざわざ加えられている。

これまで見てきたように、佐藤一斎「杉田村観梅記」がのちの杉田観梅紀行文に多大な影響を及ぼしたことはまちがいない。佐藤一斎の名はあらゆる紀行文において踏襲されていた。人々は、佐藤一斎「杉田村観梅記」によって杉田梅林を知り、訪れたいと願ったのである。さらに観梅の感激のさなかで佐藤一斎の紀行文を思い出し、

それらが組み込まれた紀行文を発表する。そしてまた新たな読者が佐藤一斎「杉田村観梅記」とともに杉田梅林に関する知識を得る。これを繰り返すことで杉田梅林は名所化していったといえる。

このように、明治期における杉田梅林と月ヶ瀬梅林は、どちらも観梅紀行文を土台とし、風光明媚な（文学的名所）としての価値も獲得したのである。

湯本 優希（立教大学大学院
博士後期課程）